

米国と台湾には希望がある、日本にはない

5月20日、台湾で頼清徳新総統が就任式に臨んだ。就任式前から台湾の国会では、民主政治を破壊することを目的とした法案が強行採決されようとしていた。実際にその「国会権限拡大法案」は5月28日に可決されてしまった。中国共産党が指令し、中国国民党が成立させた民主台湾破壊法案である。

しかしこれには台湾の大衆が立ち上がった。自然発生的な10万人のデモが強い抗議の声をあげた。彼らが暴力化しなかったのは、大統領にあたる頼清徳新総統を信頼していたからである。頼清徳は、民主台湾を守らんとする国民大衆と共に、「中国共産党＝中国国民党」勢力と徹底的に闘争するだろう。台湾の民主政治は危機にあるが、そこには希望もある。何よりも総統が台湾民主化推進のリーダーなのである。

▶5月30日、ニューヨーク・マンハッタンの裁判で、トランプに有罪評決が下った。陪審員の構成からして、有罪評決は十分に予測できた。しかしそれにしても、あまりに酷いでっち上げ裁判であった為、その衝撃は小さくなかった。現在のアメリカは、最早、法治社会ではない。アメリカの民主政治もまた深刻な危機の中にある。

しかしアメリカには希望がある。トランプはあらゆる世論調査でバイデンをリードしており、11月の大統領選挙では地滑り的な大勝利を収める可能性が高い。トランプが指導するMAGA運動は、エネルギーに拡大している。黒人やヒスパニックにおけるトランプ支持率は急上昇している。アメリカの愛国者は国内の売国勢力と戦い、勝利しつつある。そこには大きな希望がある。

▶一方、日本はどうだろう。アメリカと台湾には希望があるが、日本の愛国者には希望がない。日本の民主と自由を守り、日本を繁栄に導くリーダーが存在しないのだ。岸田首相は、無国籍グローバリストたる米バイデン政権の命ずるがままに政策を実行している。一方、独裁的ナショナリストである中国共産党政権は、日本人を威嚇し、日本人を辱めるような言動を繰り返している。呉チャイナ大使の「日本国民を火の中に」発言然り、靖国神社への落書き事件然りである。こういった国辱的な行為に対して、岸田首相は正々堂々たる抗議すらしない。しないばかりでなく、それでも日中韓 FTA を推進しようとしている。

日本の一部、特に関西財界は、中国共産党に媚びを売る媚中外交を繰り返し、今年 11 月には大訪中団を送り込むそうだ。チャイナ経済が没落に瀕しているこの期に及んでも、まだ北京詣でをしようというのだ。安倍晋三元首相が暗殺されて以来、日本の政界には、日本の国益を代弁し、日本の名誉を守る政治家の姿が消えてしまった。少なくとも、国のリーダーとして名前の出ている有名政治家の中に、希望の持てる人材は一人もいない。日本には、長期の国益を考えて、その為に行動する政治家が払底しているのだ。

▶日本人はこの絶望的状况を正確に把握するところから、出直すしかないであろう。希望は我々自身の手で創り上げてゆかねばならない。新しいリーダーは、我々自身が生み出してゆかなければならない。

ケンブリッジ・フォーキャスト・グループ代表

藤井巖喜